

(第1回)

中  
2020

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で22ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号	
氏	名
	ふりがな



一 古代中国は現代とは異なり、いくつもの国に分かれていました。そのため、有能な人材の採用が盛んで、多くの学者や思想家たちが活躍しました。孔子はその時代の代表的な思想家で、弟子たちと共に諸国を旅し、自分の考えを説いて回っていました。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「実はその、<sup>①</sup>これが私のただ一つの道楽でございましてな、……いや、道楽などと申しては、まことに失礼でございますが、正直のところ、そのような楽しみがあればこそ、こうして関所勤めなどさせていただいておりますような次第で、はい」

儀の関守は、もう七十年近い老人である。彼は、是が非でも、じかに孔子に面会させてもらうつもりで、その宿所に門人の冉有をたずねて、曲がった腰をたたきながら、しきりに<sup>②</sup>まくしたてていた。それは、孔子が魯の<sup>③</sup>大司寇をやめて、定公十三年、五十五歳の時、はじめて諸国遍歴の旅に出たばかりのところであった。――  
儀は魯の国境に接した衛の<sup>④</sup>一都邑である。

「それで、もうどのくらいお勤めです」

<sup>③</sup>冉有は、関守を孔子に会わせたくなかった。孔子の相手は諸侯か、さもなくは大夫である。いちいち小役人などに面談さしては、きりが無い。それに、なんといつても、孔子は今落魄の身である。衛の国にはいったしよつばなから、よぼよぼの関所役人などを相手にしたとあつては、いよいよ孔子の威厳にかかわる。われわれ門人としても、あまりいい気持ちのものではない。この際は、世間に軽く見られるのが、なによりもいけないことだ。なるたけどつしりと構えるに限る。そう考えて、彼は話を他の方にそらそうと努めた。

「もう、かれこれ、四十年ほどにもなりましようかな」

と、関守は、ぐつと腰をのばして、いかにも<sup>④</sup>に答えた。

「四十年！」

冉有ぜんゆうもさすがに驚かされた。

「いや、楽しみなものでございますよ。こうして関守せきしゅをしていますおかげで、いろいろのお方にお目にかかれま  
すのでな」

「なるほど……」

⑤ 冉有ぜんゆうは氣のない返事をした。

「それでも、最初のうちは慣れないせいで、惜おしいと思うお方かたを、ずいぶん取り逃がしたものでございますよ。  
しかし、もうこのごろでは、すっかりこつがわかりましてな、これはとにらんだお方かたなら、一人残らずお目にか  
かれていますのでございます。これがまあ、長年勤めた関守せきしゅの役得やくとくというものでございまいしょうかな」

⑥ 冉有ぜんゆうは少し腹が立って来て、天井てんじょうをにらんだまま、返事をしなかった。

「それはまあ、先生のお疲れのことは、よう存じております。で、ほんのちよいと、二言三言お言葉をおかけく  
ださる間だけでよろしゅうございます。どうも、お通りがかりにちらとお顔を拝したただけでは、この老爺ろうや氣が落  
ち着きませんでな。それに、孔先生こうせいといえは、これまで私がお目にかかりましたお偉い方かたが、総そうがかりでお向か  
いになつても及ばないほど、お偉い方かたのようにお察し致いたしております。場合によつては、これを思い出に、私は、  
関守せきしゅを打ち留とどめにしようか、とさえ思っているくらいでございます」

⑦ 冉有ぜんゆうは少し氣をよくした。しかしまだ取り次ぐ気にはなれなかった。

「いや、今すぐと申すわけではございません。明日あすのお立ちまでにちよいとお目にかかることができれば結構けっこうで  
ございます。なあと、私は、お待ちする分ぶんには、夜徹よとほしても構かまわないのでございます。よくこれまでにも、そう  
いうことがありましたでな、はい」

再有は思わず吹き出してしまった。関守はすかさず、

「お願いができるでございましょうか」

と、<sup>⑧</sup>いかにも心配そうな顔を、再有の前につき出した。

「お伝えするだけは致してみましよう」

再有はどうとう立ち上がった。

「まことにありがとう存じます。なあに、お伝えさえいただければ、間違まちがいなくお会いくださることと存じます。なるほどこれまでに、<sup>※</sup>四しの五ごとおっしゃるお方もなかつたではございませぬが、それはたいてい、お供とものお方かたのお指さし金かねが、さもななくば、ご本人があまりお偉えいくないお方の場合でありましてな。多少でも人間の世の中のこととおわかりの方なら、<sup>※</sup>下賤げせんの者や老人の心を、よくくんでくださるものでございませぬ」

再有はあきれて、運びかけた足をとどめると、関守せきもりの顔を<sup>⑨</sup>□のあくほど見た。関守は、しかし、その瞬間ひよいと窓の方に目をそらして、大きく腰こしを伸のばした。そして、いかにもひょうきんに、

「やれやれ、これでお願ねがいがかないましたわい」

再有ぜんゆうは、立ち止まったまま二、三度首くびを振ふった。そして、しばらくなにか思案するようだったが、そのまま、思おもいきったように奥にはいつて行いった。

ものの五、六分もたつと、彼は<sup>⑩</sup>仏頂面ぶつちやうめんをして戻もどつて来た。そしてごく無愛想むあいそうに、

「おあいくださるそうです」

そういつて彼は、次の部屋にいた若い門人もんじんを呼んで、奥に案内するようにつけた。

関守は、これまでの熱心さにも似ず、再有ぜんゆうの顔を見もしないで、

「そうですか、それはそれは」

といいながらのそのと部屋を出て行った。

再有は苦笑しながらそのあとを見送ると、椅子に腰を下ろして腕組みをした。

（やはり取り次いだのがいけなかったのだ。取り次げば会おうとおっしゃるのが、先生のいつもの流儀なのに、ついあの老爺にしてやられてしまった。それにしても、先生も少し軽率じゃないかな。あれほどお会いになってはいけないというのに、いやそれはおもしろそうな人物だ、とおっしゃる。おもしろいもおもしろくないも、たかが関所役人ではないか。それに四十年もそんな仕事にこびりついているというのだから、たいてい知れている。これから諸侯を相手に活動なさろうというやさきに、あんな老爺に会ってどうなさるおつもりなんだろう。今ごろはあの老爺、きつと、さっきのように煮ても焼いても食えないようなことを、べらべらしゃべっているだろうと思うが、あんな氣狂いじみた老人を相手にされたんでは、先生も結局自らを辱しめることになるばかりだ。

それにつけても、魯の大司寇でおられたころのことが思い出される。ああしたりっぱな官職についてさえおられれば、こんな辱しめを受けられることもなかったろう。愚痴なようだが、やはり野には下りたくないものだ。道を樂しむのなんのといつても、官職を離れたが最後、世間の評価はすぐ変わってくる。それが世の中というものだ。だから先生にもよほど自重してもらわないと、さぎさぎどんなみじめなことになるか知れたものではない。とにかく、今日自分があの老爺を取り次いだのは失敗だった」

彼がそんなことを考えているうちに、用たしに出ていた門人たちが四、五人、どやどやと帰って来た。彼は待ちかねていたように、すぐ事実を彼らに話した。そして、

「ありのままを話したら、先生もまさか会おうとはおっしゃるまい、と思ったのが、ぼくの見込みが良かった」と、いかにも残念そうにつけ加えた。

「そりゃ先生は、⑪ことに、いつも心を用いられているからね」

と、一人がしたり顔にいった。

「なあに、先生のことだ、まさかそんな奴に恥をかかされるようなこともあるまい」

と、他の一人が事もなげにいった。

「それはそうさ。しかし、そんな人間にお会いになったということ自体が、先生の値打ちを下げることに成りしないかね」

と、またある者がいった。

「ぼくが心配するのもその点だ」

と、再有はまた腕組みをして、ため息をついた。

みんなもそれには同感だった。彼らは、自分たちの値打ちまでが下がっていくような気がしてならなかったのである。

「その老爺の君に対する態度はどうだった。教えを乞おうというようなふうは、ちつとも見えなかったかね」

と、一人が再有にたずねた。

「そんなふうは鵜の毛ほどもなかった。いや、かえってぼくを愚弄しているとしか思えなかったね」

「先生が大司寇でいられたころは、下っぱの役人の目には、われわれもひとかどの先生に映っていたものだがね」

「実際だ」

みんなは惘然とした。

しばらく沈黙がつづいた。その沈黙の中から、しだいに足音が近づいて、しずかに部屋の戸があいた。関守である。

みんなは不快な目をいつせいに彼の顔に注いだ。彼は、しかし、にこにこしながら彼らに近づいて、

「ほう、みなさん孔先生のお弟子でいらつしやいますかな」

と、小腰をかがめながらいった。そして再有の方を見て、

「さきほどは誠にありがとうございます。いや、今日という今日は、この老爺も嬉しゅうてなりません。これで長生きをしたかいがあつたというものでございます。そりや、これまでにもずいぶんりっぱなお方にお目にかかりましたが、孔先生にくらべると、まるで月とすつぽんでございますよ。ちよいとお目にかかりましただけで、この胸がすうつとするではありませんか。だんだんお話を承つておりますうちに、私もすつかり頭が下がりましたな。もう私の方から、なにもいうことはありませんだ。

いや、この老爺、これでなかなか負けん気が強うございましてな、たいていのお方には一理屈をこねてみないと承知がならないのでございます。ところが今日という今日は、まるで子どもになつたような気がいたしました。これであんと若返りができましたわい。こう若返つたところで、すうつと死ねたら、どんなにしあわせでございましょうな。なにしろ、この節のような、めちやくちやな世の中を見せつけられて、しかめつたらをしながら死んでいくんでは、やりきれませんからな」

再有も、他の門人たちも、あつけにとられて、老人の顔を見守つた。老人は平気でしゃべりつづけた。

「ときに、あなたがたはいい先生にいたしましたものでございますな、若いころから、あんな先生について学問ができますりや、生きていのがいやだなんていう気には、金輪際なりませんよ。それはなるほど、こうしてあてもなくついて歩かつしやるうちには、心細い気がなされることもおありじやろ。なにしろ、まだみなさんお若いでな。

だが先生の値打ち、……いや、値打ちなどと申してはもつたいのうございませうかな、……ええと、その、先生のほんとうの魂、つまり先生の心の奥の奥にある、あの憂いも、惑いも、懼れもない尊い魂にしんみりふれて、存分にその味を噛み出すには、ともどもに難儀をするに限りませうよ。あなたがたのうちに、万が一にも、先生が



魯の大司寇をおやめになったことで、氣を落としていなさる方がありましたら、それこそ罰が当たりましょう」

老人の顔は、しだいに紅潮してきた。門人たちもそれにつりこまれて、いつとはなしに「居ずまいを正した。」

「それに第一に——」

と、老人はせまるように、一步門人たちの方に近づいて、

「<sup>⑭</sup>先生を魯の国だけに閉じこめて、役人などさしておくのは、もつたないと思ひませぬかな」

門人たちはおたがいに顔を見合わせた。だれも返事をする者がなかった。すると老人の声が、急にどなりつけるように、彼らの耳に落ちてきた。

「先生は、あなたがたの立身出世のために、生まれておいでになったお方ではありませぬぞ！」

部屋じゅうが石のように固くなった。老人は少し前こごみになって、顔をつき出していたが、その目が異様に光って、じつと冉有の顔を見つめていた。

冉有は、その固い空気の中を、もがくようにして、なにかいおうとした。すると老人は急になっこり笑って手を振った。

「いや、これはつい大声をたててすみませなんだ。それはもう、あなたがたが、先生のお身の上を心から氣にかけていなさることは、この老爺の目にもよくわかりますわい。だが、天下にこう道がすたれては、先生にでも難儀をしていただくより手がござりますまい。いわば、それが先生に下された天命じゃでな。」

それはそうと、この衛の国では、なにかというとお上からお布告が出て、そのたんびに、木鐸※ぼくたくという変な鈴をがらがら鳴らして歩きますが、まさか魯の国ではそんなばかしいまねはなさるまいな。あんなものはただやかましいだけで、なんの役にも立つことじゃありません。なにぶんお上がお上でござりますからな。私はこれま  
である音をきくたびに、いつも思いましたよ。もし天のお声を伝えてくれる木鐸ぼくたくというものがあつたら、とな」

彼はそこで探るように門人たちの顔を見回していたが、ふたたび厳肅な顔になっていった。

「おわかりですかい。あなたがたの先生こそ、これからその天の木鐸ぼくたくにおなりだということを」

また沈黙がつづいた。老人は門人たちにひよこひよこ頭を下さげて、

「いや、これは長いことおしやべりをいたしました。では、おたつしやで旅をおつづけなさりませ」

そういうと彼はのそのそと部屋を出て行った。

門人たちは身じろぎもしないで、彼の後ろ姿を見送っていたが、彼が戸の外に消えると、冉有ぜんゆうは急に目がさめたように立ち上がって、あたふたと孔子の部屋に出かけて行った。

(下村湖人『論語物語』より)

※宿所しゆくしょ……宿泊する所。やど。

※魯ろ……古代中国の国の一つ。孔子の出身地。

※大司寇だいしこう……法務庁長官

※定公ていこう……魯の国の君主。

※衛えい……古代中国の国の一つ。

※一都邑ひととち……一都市

※大夫たいふ……中国古代の官位名。ここでは広く高位高官のことを言っている。

※落魄らくはく……落ちぶれること。

※四の五の……あれこれめんどろなことを言うさま。

※下賤げせん……身分が低いこと。

※野やに下くだる……官職を離れて民間の生活に入る。

※自重じちよう……自分の行いを慎んで、軽々しくふるまわないこと。

※愚弄ぐろう……人をばかにして、からかうこと。

※愾然ふぜん……失望や不満でむなしくやりきれない思いでいるさま。

※木鐸ぼくたく……古代中国で、法令などを広く人民に示すときに振り鳴らした、木の舌のついている大きな鈴。

問一 — 部① 「これが私のただ一つの道楽どうらくでございましたな」とあるが、これとはいったい何を指しているか。

本文の言葉を用いて「〜こと」と続くように答えなさい。

問二 — 部②・⑫・⑬の意味として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

② 「まくしたてる」

ア 布を縫<sup>ぬ</sup>って幕を仕立てる。

イ 曲がった腰をしつかり直す。

ウ 勢いよく続けざまにしゃべる。

エ すみずみまでじろじろと見る。

⑫ 「ひとかど」

ア 非常にすぐれた

イ ちよつとした

ウ ありきたりの

エ それ相應の

⑬ 「居<sup>す</sup>まいを直す」

ア きちんとした姿勢に座り直す。

イ 座っていた場所を移動する。

ウ しつかりとした身なりに整える。

エ 住まいのことが思い出される。

問三 — 部③「冉有は、関守を孔子に会わせたくなかった。」とあるが、それはなぜか。その理由を見抜いた関守の言葉から、七字で抜き出して答えなさい。

問四 空らん④に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 面白そう イ けだるそう ウ 残念そう エ 得意そう

問五 — 部⑤「冉有は気のない返事をした。」⑥「冉有は少し腹が立って来て、」⑦「冉有は少し気をよくした。」とあるが、冉有の心境の説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 関守がこれまでに会ってきた人々には関心がなかったが、いろいろな人に会える特権を乱用していることには怒りを覚えた。しかし、改心して関守を辞めようとしている態度には感心した。

イ 関守のような小役人の相手をするつもりはなかったが、先生と当然会えるような口ぶりに気を悪くした。しかし、先生のことを高く評価していたことに関してはうれしく思った。

ウ 冉有はすでに関守の話に興味を失っていたのに、まだ話を続けるので早く終わらないかとイライラしていた。でも、先生の疲れを労わる言葉にホッと胸をなでおろした。

エ 冉有は四十年という年数に驚いて、その後の言葉はあまり耳に入らなかった。偉そうに話す態度は気に入らなかったが、冉有の顔色を見て態度を変え、下手に出てきたので可笑しかった。

問六

——部⑧「いかにも心配そうな顔を、冉有ぜんゆうの前につき出した。」とあるが、それはなぜか。その理由としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 冉有が先生に会わせてくれそうもなく、このままでは会えないのではないかと心配でたまらなかつたから。

イ わざと心配そうな表情をすることで、哀れんで取り次いでくれるのではないかと思つたから。

ウ 吹き出してしまった冉有に、面白い表情をすれば機嫌が良くなり、会わせてくれるようになるのではないかと思つたから。

エ これまで話しすぎてしまったことを反省し、自分の表情から先生に会いたい思いを伝えようとしたから。

問七

——部⑨はじつと見つめる様子を言う表現である。空らんに入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問八

——部⑩「ぶつちやうづら仏頂面をして戻もどつて来た」のはなぜか。その理由を述べた次の文の空らんを、指定された字数で本文の言葉を使って答えなさい。

「孔子に

1

(十九字) のに、

2

(九字) から。」

問九 空らん⑩には、孔子の「人の己おのれを知らざるを患うれえず、人を知らざるを患うれう（人が自分を知らないことを心配するのではなく、人を知らないことを心配する）」という意味の教えの言葉が入る。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が人に知られることよりは、人を知る
- イ 自分が人を知ることよりは、人に知られる
- ウ 人が自分を知らないことよりは、自分を知る
- エ 人が自分を知ることよりは、自分から知られる

問十 — 部⑭で関守は門人たちに対して「先生を魯の国だけに閉とじこめて、役人などさしておくのは、もったいないと思いませんか」と言っているが、それでは関守は孔子がどのような人であるべきだと言っているのか。 — 部⑭の後の関守の言葉より、四字で抜き出して答えなさい。

問十一 この文章を読んだ生徒が、感想を述べ合っている。次のA～Dの四人の感想の中で、本文を間違つてとらえている生徒を記号で答えなさい。

A 「この文章には孔子は出てこなかったけれど、どれだけすごい人だったのかということがよくわかったよ。関守は孔子に会う前から、孔子のことを強く慕<sup>した</sup>っていたね。僕も孔子のように慕われる存在になりたいな。」

B 「そうだね。孔子には門人が何人もいて、また他国の関守にまで知られていたということからも、優れた思想家だったということが言えるだろうね。僕もこの時代に生きていたら、色々なことを教えてもらいたかったな。」

C 「もし僕たちが孔子の門人だったら、僕たちも多くの尊敬を集めることができただろうしね。大人物になるためには、やはり優れた先生に就いて教えるもらうことが大切だよね。」

D 「でも、官職を離れていた孔子に従って旅を続けるというのも、大変だったんじゃないかな。そんな門人たちにとって、関守が孔子をほめていたのは、大きな励ましになったと思うよ。」



〔二〕 次の文章はMGクラブサッカーチームの試合の案内文です。これは、キャプテンのT君がチームのメンバーに作成したもので、表記上足りない部分や少しわかりにくいところがあります。そのことを理解して文章を読み、後の問いに答えなさい。

(案内文は試合の三日前にチームのメンバーに配布されました。)

来週の二月十一日(火曜日)は、東山村市ワクワクサッカー大会が開催かいさいされます。

対戦相手は、桜が丘サッカーチーム、会場は、夢が丘競技場です。MGクラブサッカーチームは、三試合目の一二時二〇分より試合が開始されます。出場選手のチェックは試合開始十五分前、その三〇分前にメンバー表を本部に提出します。選手登録証は各チームの代表責任者によって提出されます。

集合場所は、鉄道の青空線の、駅南口の改札出口で、メンバー表提出時間の二時間前を集合時間とします。集合する駅の改札出口の目の前に、谷川方面行き3番と表示されたバス停があります。そこから発車する谷川方面行きのバスに乗りし、夢が丘競技場前でおります。そこから徒歩五分くらいで会場に着きます。バス停には私がいまいますので、会場まで案内しますが、みなさんは、何かの理由で遅れた場合なども考えて、一人でも来られるよう配付した会場までの地図を①確認しておいてください。夢が丘競技場に入ったら、チーム代表責任者の南川コーチが②言っていたように、会場の手伝いをしていただいているスタッフのみなさんへのあいさつを忘れないようにしてください。

会場から一番遠い所に住むA君は、集合場所まで次の行き方をしてください。南山線、梅ヶ谷駅から電車に乗り、二つ目の桜川駅で隣のホームの西川線に乗り換え、そこから三つ目の紅葉谷駅で電車への最後の乗り換えをして、

希望の丘駅で降ります。A君以外のメンバーは住所から考えると、<sup>③</sup>紅葉谷駅からの乗車か桜川駅からの乗車になります。

なお、当日の試合会場で提出する選手登録証は、各自宅で保護者から受け取り、自分自身で大会会場に持って行ってください。<sup>④</sup>選手登録証は、メンバー表と一緒に本部に提出されます。

問一 MGクラブサッカーチームの大会当日の(A)集合場所の駅名はどこですか。案内文よりそのまま抜き出し答えてください。

また、正確な(B)集合時間を後のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

ア 九時三十五分    イ 九時五〇分    ウ 十時五分    エ 十時二〇分

問二 A君が二回目に乗換える電車の駅名はどこですか。案内文よりそのまま抜き出し答えなさい。

問三 ——部①「確認しておいてください」の主語を一文節で答えなさい。(例 サッカーが)

問四 ——部②「言っていた」を正しい表現に直したものを次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

ア お伝えして    イ 申し上げていた    ウ しゃべっていた    エ おっしゃっていた

問五 — 部③ 「紅葉谷駅」から乗車する電車は、何ですか。案内文より「○○線」という形でそのまま抜き出し答えなさい。

問六 — 部④ 「選手登録証」を本部に提出するのは誰ですか。次のア～エからひとり選び記号で答えなさい。

ア T君    イ 南川コーチ    ウ A君    エ 会場の手伝いをしているスタッフ

〔三〕 次の短歌や俳句（A～C）について後の問いに答えなさい。

A いにしへの奈良の都の八重桜みやごけふ九重やえづくらぎにほひぬるかな ※九重：宮中（天皇のいらつしやる皇居の中）

B 雪とけて村いっばいのこどもかな

C 石がけに子ども七人腰こしかけてふぐをつりをり夕焼け小焼け

問一 Aの短歌とBの俳句のそれぞれの鑑賞かんしょうとしてもつともふさわしいものを後のA～Eより選び、記号で答えなさい。

《Aの短歌》

ア 昔の奈良の都の八重桜が、今日は、九重の宮中でこれから咲き始めようとしているところだ。

イ 昔の奈良の都の八重桜が、今日は、九重の宮中であつという間に散ってしまったことだ。

ウ 昔の奈良の都の八重桜が、今日は、九重の宮中でひときわ美しく咲きほこっていることだ。

エ 昔の奈良の都の八重桜が、今日は、九重の宮中で腐（くさ）りだし、においを発していることだ。

《Bの俳句》

ア 雪がいつぺんに溶け始めたために、川のように村中に水があふれ出て、子どもたちが外に出られず困っ

ていることだ。

イ 雪解けの季節をむかえ、家の中にいなければならなかった子どもたちがいつせいに外の村に出で楽しく遊んでいることだ。

ウ 寒さの厳しい北国では、冬にふり積もった雪の量が、まるで村いっぱい子どもたちがあふれているぐらいすごいものなのだ。

エ 雪が解けると子どもたちが雪だるまを作れなくなるので、村全体の人たちで雪がふり続け積もることを願っていることだ。

問二 Bの俳句には季節を表す季語がある。その季語を抜き出し、季節も答えなさい。

問三 Cの短歌についての感想としてもっともふさわしいものを選びなさい。

ア 子どもたちの元気にはしゃいでいる様子が、歌声のように聞こえてくるようだね。

イ 崖の近くに子どもたちがいて、今にも落ちそうな怖い感じが伝わってくるね。

ウ 真夏の夕方に、花火大会を楽しみにしている子どもたちの様子が感じられるね。

エ 子どもたちの姿が美しい背景の中にうかび上がって、絵のような感じがするね。

四

次の①・②の慣用句の使い方として正しいものをそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

①胸を打たれる

- ア 試合に負けたつらさを知って胸を打たれる。
- イ 病院に通う祖母の病気が心配で胸を打たれる。
- ウ 自然の山々の美しい景色を見て胸を打たれる。
- エ 親せきの赤ちゃんに目をそらされ胸を打たれる。

②首を長くする

- ア 幼なじみの友人が家に遊びに来るので、首を長くして待った。
- イ 足もとの悪い登山で疲れないために、首を長くして歩いた。
- ウ 勉強のため毎日忙しかったので、首を長くして過ごした。
- エ くじで当たった座席が舞台から遠いので、首を長くして観た。

**五** 次の①・②の（ ）に入る適語をそれぞれ後のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

① 姉は、学校で表彰された作文を、友人に（ ）した。

ア 自画持参    イ 自我自賛    ウ 自我持参    エ 自画自賛

② 母は決断力があり、会社では、部下からの質問や、部下がするべき仕事の役割を（ ）に答える。

ア 短刀直入    イ 単刀直入    ウ 担当直入    エ 短答直入

**六** 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 健康ジョウタイを見て考えよう。

② この展覧会は小学六年生をタイショウとしています。

③ 相手にセイカクに伝えることが大事です。

④ 先生はシンミになって話してくださいました。

⑤ 生活習慣をアラタめる。

七

次の——部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 会社の業績を上げる。
- ② 書物を刊行する。
- ③ 修学旅行の支度をする。
- ④ 消費税を納める。
- ⑤ 健康を損なう。





